
わ た し

顔晴る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたし

【コード】

N16200

【作者名】

顔晴る

【あらすじ】

自伝というか、ふと、自分のことを書いておこうと思って書きました。ちよっと変わった姉妹の話です。

前書き、そして私が生まれるまで

「私」は、現在大学生。同じく大学生の姉と両親と一緒に暮らし、のほほんとした生活を送っています。

ちよつと人から離れた生活を送る私と、ちよつと珍しい病気を持つ姉を中心に、思い出を振り返っていろいろと思います。

1．誕生

姉は私より2年早く生まれています。

誕生日は、姉が8月30日、私が8月24日。約一週間だけ、年子になれる期間があります。生まれ方も普通でした。

しかしふたりとも、とにかく大きくはあつたようです。

特に姉は、生後すぐから看護婦さんに「ガッツちゃん」と呼ばれるほど、大きく元気な子だったようです。

2

2．私が生まれるまで

アパートに、親子3人で暮らしていたそうです。

ご近所のお友達とも仲良く遊ぶ、元気な子だったようです。

切迫流産しそうな私が母のお腹にいたときも、ひたすら元気に遊んでいたようです。

私誕生と乳児期

3・私誕生

明け方、私は外の世界に出ようと思ったようです。

まるで、乙女座になる日を待っていたかのような日に出てきました。

2人目の女の子ということもあり、少々がっかりされたようです。

姉が生まれたときは、父や祖父が、ああでもないこうでもないと考え続けたために

1週間名前が無かったそうですが、

私のときは、父が期限近くになって、ふと決めたそうです。

ですが、私は自分の名前の方が好きです。この名前で良かったと、本当に思います。

4・乳児時代

姉は未知の物体である妹が気になって仕方がなかったようです。

ぷにぷにとつついているような写真や、一緒に寝転がっている写真が残っています。

2歳やそこらの姉は、よく転ぶ子だったので、

母は姉が私の上に尻もちでもつきはしないかと心配したそうですが、姉は私の上に尻もちをついたり、私をふんずけたりしたことはなかったそうです。

そして姉は、暫くすると重要な係を引き受けてくれたそうです。

私が用を足してしまっただかどうかを、クンクンと嗅いで母に知らせていたそうです。

私が8カ月のとき、今の一戸建ての家に引っ越しました。

幼児期

5．幼児時代1

1歳の誕生日の前日に、私は初めて歩いたそうです。

よちよち・・・とほんの1、2歩歩けたようで、姉と母が

「わあ凄い！凄いよ！もうちょっとここまで来れたら素敵！」

なんておだてると、よちよちとそちらへ歩いたそうです。

おだてられると調子にのってやる性格は、今も昔も変わらないようです。

歩くことにしても何にしても、下の子は上の子より成長が早いようです。

私はきつと、早く姉のようになりたかったのでしょう。

姉はきつと、妹に色んなことを教えたかったのでしょう。

私がオムツを脱いだきっかけも、

「姉ちゃんがトイレに行くなら私も行く」だったようです。

そんなこんなで、母と姉のおかげで、基本的な生活習慣は身に付いたようです。

6．幼児時代2

3年保育の幼稚園に入園することになりました。

姉の通う幼稚園と同じ幼稚園です。カトリック系の幼稚園でした。

朝は園バスで姉と一緒にいきます。

園に着いたら姉と離れたくなくて号泣...とはならなかったようで、ケロッと通っていました。

この頃からぼんやりと記憶があるのですが、我ながら肝の据わった子だったと思います。

何でもやってみたがるし、怖いことも、やってごらんと母が言えば、母から離れても平気でした。

そして、ガサツな子でもありました。

朝のマリア様へのご挨拶は忘れるし、制服はぐちゃぐちゃに着るし、足はそろえて座らないし、友達と喧嘩はするし…

お譲ちゃん、といった感じの子が多かった中で、私は中々に浮いていたと思います。

しかし何故か、「外で泣いたら負けだ」というプライドがあり、大抵のことは何とかかんとか乗り切っていました。

ですがある日お砂場で、隣の子が使っていないなかったスコップか何かをとおうとした時でした。

隣の子は取られたことが気に入らなかつたらしく、私の顔に砂をかきました。

この幼稚園で私が泣いたのは、おそらくこの時だけです。ものすごく泣いたような気がします。

その時まで、遊びの時間に姉と関わったことは一度もありませんでした。

誰かが呼んできたのか姉が自分で気づいたのかは分かりませんが、その時姉は来てくれて、私を守ってくれたことを覚えています。

とまあ綺麗な思い出を書きましたが、この頃になると、家では喧嘩三昧でした。

3〜4歳ともなれば、年下の私も姉に反撃するようになり、女の子同士とは思えない喧嘩を繰り返していました。

続・幼児期

7・幼児時代3

初めてのクリスマス会の日、私は幼稚園を休みました。風邪、ということになってはいましたが、実は某F幼稚園の”受験”に行っていました。

F幼稚園は、幼稚園から中学校までエスカレーター式の学園でした。

私立ではないですが、まあ、私立のようなものでした。姉も昔受けたそうですが、抽選で外れたそうです。

運の良いことに、私の時は抽選に当たり、年中からはF幼稚園に通うことになりました。

この辺りが、私の「ちょっと人から離れたところ」です。都会では私立に行くのは普通かもしれませんが、私の地方では、そして特に私の地域では公立に行くのが普通、何でわざわざ遠くに行くの？と言われる程です。

8・幼児時代4

F幼稚園は、とてもものびのびしたところでした。

とにかく自由に遊ぶ時間が多く、
をしましよつというのは行事のためのことが多かったです。

長かった髪をばっさり切った以外、
図太い私は何も変わらず楽しく幼稚園に通いました。

姉は小学校に入学し、楽しくやっていたようです。

何事も真面目に取り組む子なので、使命感というか、何かに燃えていました。

そしてよく、友達を連れてきました。

姉は公立の小学校なので、近所の友達というのがたくさんいました。

1度ランドセルを置いてからうちに来て、遊んでいました。

そこで私は、「おねーちゃんたち遊んで」と言えれば良かったのですが、
姉を取られた悔しさやら、自分の友達は来ていないことの寂しさ等で、

ちよっかいはかり出しに行ったもんだから、とにかく嫌われました。
お母さんと、「おかあさんといっしょ」「忍たま乱太郎」などが私の癒しでした。

年中・年長と、こんな感じでした。

小学校入学、バス通学の思い出

9・小学校入学

小学校は、遠かったです。幼稚園の隣なのですが、自転車ではない分遠かったです。

直進して自転車で20分弱のところを、バスと路面電車を乗り継いで50分かけて通いました。

朝、バスの時間を見て行ってそれなので、帰りは1時間以上かかることもありました。

小学校に入学する前に通う練習はもちろんしましたが、

学校側から送り迎えをすることを言われていたこと、同じバス停に同級生がいないことから、

バス停までは母と一緒に行っていました。

バス停まで着けば、上級生のお姉さんがいることもあります。

でも、そのお姉さんは次のバスに乗ることも多く、あまりいませんでした。

サラリーマンの方は、2010年現在では考えられないほど沢山いたのですが

まあ、所詮1年生なので、お母さんにべったりだった気がします。

ある日、ひとりのサラリーマンの方が、

「お母さん、そろそろ毎日付いて来られなくても、私たちがいますから大丈夫ですよ。」

と言って下さったそうです。

その後は、バス停の前の信号まで、大きな道に出るまで、道のりの半分まで…と縮めていき、

やっと、ひとりでバス停まで行き、バスを待つということができるようになりました。

このサラリーマンの方は、その後後輩が増えたときも優しく待ち

時間の相手をして下さいました。

私が5年生か6年生に上がる春に退職されるまでずっと、私たちの相手をして下さいました。

今でも本当に、感謝しています。またお会いしたいものです。

10.番外編〱バス停の思い出

朝7時台最初のバスは、サラリーマンだらけでした。

でも、だからこそ、いつも決まったメンツが揃って、仲良くしていました。

特に私が利用していたバス停は人数が多く、

道路に植えてあるサツキ1ブロック分より長く並ぶ程でした。

私を含め、そのバス停を使う子どもにもニコニコして下さる方、いつもお相手をして下さった方がいないときにそつと手助けして下さいる方、

「あの人が来たらもうすぐバスが来る」と言われていたOLさん…色々な方がいました。

そんな中で1番思い出深かったのは、ある日バスが着く数分前に車でバス停に来て、

挨拶をされた方です。

「昨日で定年退職いたしました。 皆さん今までありがとうございます。」

と深々とお辞儀をして、去っていかれました。

バス停という1つのコミュニティにまで挨拶を下さって、嬉しくてそして寂しかったです。

そんな、サザエさんの時代のような雰囲気バス停でした。

その後バス停には待合所ができ、そもそもバスの利用者が減ったこともあり、

みんなで並んで…というのは無くなっていきました。
「あの頃は良かった」なんていう年齢でもないですが、
あの頃は良かったと、思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1620o/>

わたし

2010年10月12日13時02分発行